第２章　郷土の歴史

現在、私たちは、人間を宇宙空間へ頻繁に送ることができるほど、成熟した社会に生活している。しかし、ここに至るまでには、人類の長い歴史があり、そこには、いろいろな変革や進歩があったからこそ、このような偉業も成しとげられたはずである。私たちは、現在をよりよく知るために、過去を訪ねることが必要である。これから、私たちの郷土がどのような歩みをしてきたのかを、日本史との関わり合いの中で明らかにしていきたいと思う。

１　小田原のあけぼの　―旧石器・縄文・弥生―

大昔、私たちの祖先はいったいどんな生活をしていたのであろうか。今からおよそ１，６００年ほど前までは、文字を使っていなかったので、文字記録は残っていないが、日常使った道具や、住居の跡・食糧としたものの一部などを残している。これらのものは、長い年月地中に埋まっていたが、後の世になり、土地を掘り、出土した遺物を調べて研究を進めた人々の努力により、今では、大昔の人々の生活の様子が、だんだんと明らかになってきた。このように、いろいろな遺物や遺跡を調べて、大昔の様子を研究する学問が考古学である。

大昔から紀元３世紀までを、この考古学にもとづいて時代区分すると、次のようになる。

紀元前１３，０００年頃（およそ１５，０００年前）までに日本列島に住んでいた人々は、石器や木器などを道具として生活をしていた。まだ、土器の製法を知らなかったこの時代を旧石器時代とよんでいる。

千代吉添遺跡での調査風景

次に、紀元前１３，０００年頃（およそ１５，０００年前）より、新しく生活の中で土器を使うようになった。土器の表面に縄を転がしてつけた文様（縄文）がつくことから縄文土器を使用した時代ということで縄文時代とよばれている。この時代は、地域により異なるが、今からおよそ２，３００年前頃（紀元前３・４世紀）まで続いたようである。

紀元前７～６世紀頃になると、大陸から新しい文化が西日本に伝わってきた。金属器の使用や、米づくりの技術をもち、さらに縄文土器とは異なった土器をもつこの文化は、やがて日本列島にひろがってゆき、紀元後３世紀頃まで続くのである。縄文土器とはちがった種類の土器が、東京の本郷向丘弥生町からはじめて発見されたことから、この時代を弥生時代、土器を弥生土器とよんでいる。

旧石器時代ナイフ形石器

（八幡山古郭本曲輪第Ⅰ地点（小田原市城山）より出土）

１　狩猟と採集の生活

旧石器の発見　１９４９年(昭和２４)群馬県の岩宿（現みどり市）で、赤土の中から石器が発見された。この石器の発見は、日本に縄文文化よりさらに古い文化をもった人々が、生活していたことを明らかにする重要な発見であった。それ以後、赤土の中の石器発見に関心が集まってきた。赤土の中からみつかった石器は旧石器とよばれ、すべて打製石器である。

旧石器時代は今よりも冷涼な気候で、動物を求めて集団で移動を続ける狩猟や植物の採集が中心の暮らしだった。

この時代の出土品は、市内では石器以外は確認されていないが、当時は動物の骨を加工した道具やアクセサリーをはじめとする多様な生活道具があったはずである。

小田原城跡八幡山古郭本曲輪で出土したナイフ形の石器は、ヒトが作った道具としては小田原では最も古いもので、３万年前までさかのぼる可能性があると考えられている。箱根産の黒曜石を用いて、ガラスのように鋭利な刃がつくられている。黒曜石はかたく、

また動物の皮などをはぎとるのに便利であったので、当時は利用価値の高いものであった。黒曜石はどこにでもあるというわけでなく、箱根山中では須雲川に産出するので、それを求めて当時の人々がそこに入り込んだのではないかと考えられる。短い期間のためか、住居の跡や炉など、生活の様子を示すものは何も発見されていない。

また、小田原城跡御用米曲輪（ごようまいくるわ）から出土した石核は、石器を作るための石を割り取った残りの部分であるが、この石は緑色細粒凝灰岩（りょくしょくさいりゅうぎょうかいがん）（「丹沢石」とも呼ばれる）といって、おそらく酒匂川の河原から運んできたものであろう。石器に使われる石材には一定の傾向があるので、当時から良い道具を作るために良い材料を求めてあちこち探していたことがわかる。

縄文土器　土器の製作技術をもたず、石器や木器などを利器とした旧石器時代は、やがて紀元前１３，０００年頃より、新しく土器を伴う縄文時代へと移っていく。近年、縄文時代と呼ばれる時代が「未開で未発達」あるいは「貧しい狩猟採集民」であるというイメージを覆す発見があいついでいる。

縄文時代になると、定住のあかしであるムラもできて、こうした暮らしの中で盛んに縄文土器が作られるようになる。縄文時代は紀元前１３，０００年前から、約１万年という極めて長い期間続いたので、ひとくちに縄文土器といっても、時期や地域によって、様々

勝坂式土器
（久野諏訪ノ原遺跡群より出土）

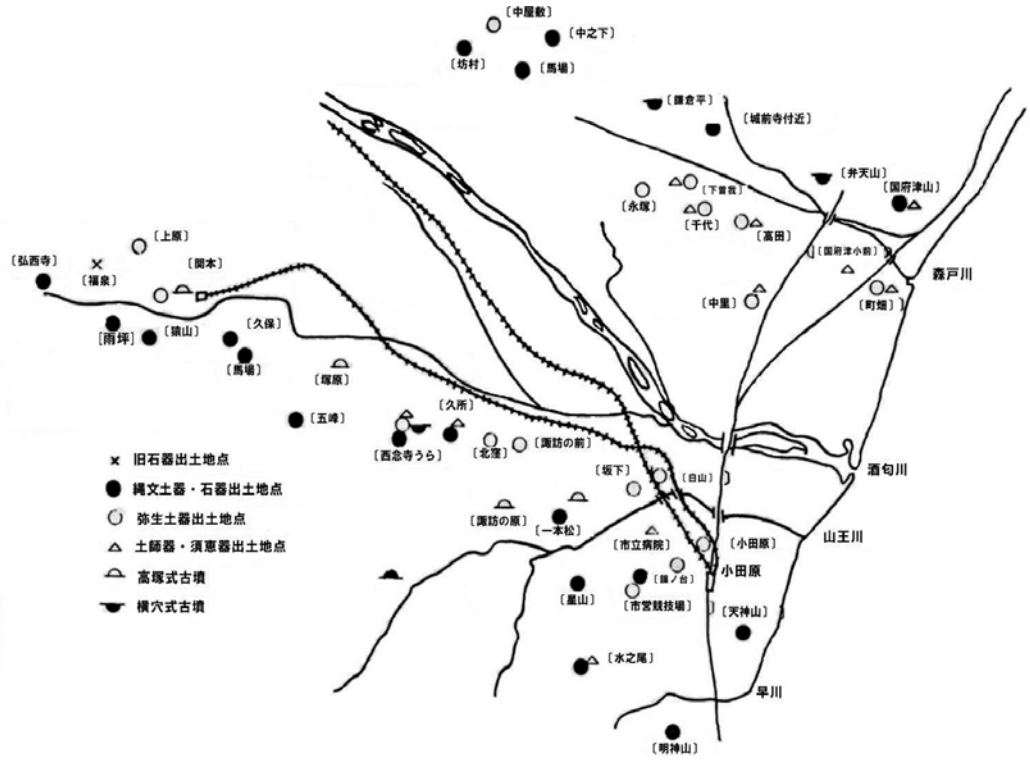
関山Ⅰ式土器
（羽根尾貝塚より出土）

な形や文様があるものの、その中にも一定の傾向があるので、土器を見ると、どの地方のいつの頃のものかがわかる。

この頃、世界ではいわゆる四大文明が起こり、栄えていく時期である。四大文明にあって縄文文化にないもの。それは農耕である。しかしこの頃の日本列島は、およそ１５，０００年前に気候が温暖化し、豊かな森が増え、四季が明確に移り変わっていく環境へと変化していった。農耕という選択肢を持たずに、狩猟・漁労（ぎょろう）・植物採取による持続可能な社会を形成していたと考えられる。

諸説あるが、エジプトやメソポタミアの土器が生まれたのが９，０００～１万年ほど前であるのに対し、縄文土器は１５，０００年前にはすでに作られており、世界で最も古い土器のひとつである。

羽根尾貝塚（小田原市羽根尾）は、今から５，７５０～５，３５０年前の縄文時代前期につくられた貝塚と泥炭層からなる遺跡であるが、ここから出土した土器は、表面に大変細密な文様が施されているものが多い。出土した関山Ⅰ式土器は大変美しい土器であるが、出土した時には分厚いおこげが付着しており、飾って鑑賞するので



はなく日常生活に使われる土器だったと考えられる。縄文時代の初めに見られる、底がとがった土器は何とも不安定に思えるが、当時の人々は、この土器を住居の中央部にある炉の端にいけこみ、まわりを小石で囲み、火をたき、煮炊(にた)きに利用していた。したがって、土器の下の部分より中央部の方がよくこげている場合が多い。また、中には、よく見ると赤漆が塗られた土器もある。日本文化を代表するものの一つが漆製品だが、すでに縄文人たちは漆を使いこなしていたことや、色に対しても特別な美意識をもっていたことは大きな驚きである。

なお、縄文土器は、はじめはとがった底や丸底であったが、やがて平底で、安定性のあるものに変わり、煮炊きから貯蔵用にと、広く活用されるようになっていった。

およそ６，０００～４，０００年前の縄文時代中期になると、土器は文様が立体的でダイナミックなものが多く見られる。基本は勝坂式のように深鉢形をしているが、中には釣手土器のような独特の形のものが認められる。

およそ４，０００～３，０００年前の縄文時代後期になると、形や文様がすっきりした端正な感じのものが多くなってくる。また、これまでどおりの深鉢形のものに加えて、皿のような浅鉢形や急須のような形をした注口土器なども数多く見られるようになった。

土器と同じように、ねん土でつくった人形のようなものが見つかることがまれにある。これは土偶(どぐう)といって一般的には女性をかたどったとされるものであり、当時の人々が、豊かで平和な生活を祈るために用いたものらしい。

いろいろな道具　縄文時代のムラの跡や貝塚などからは、当時の人々の生活用具が数多く発見されている。土器のほかに、石を加工して作った石器、動物の骨や角などを材料として作った骨角器など、すべて当時の生活用具である。

石器は、旧石器時代からの打製石器に加えて、縄文時代になると、表面のよくみがかれた石器が使われるようになる。これを磨製(ませい)石器という。

石器には、用途によりいろいろな種類がある。

時代区分	遺跡名	久野・南足柄町方面																					千代・国府津方面										曽我・大井町方面					早川・箱根町方面							備考
		小田原	鐘ノ台	市立病院	荻窪	白山	諏訪の原	諏訪の前	北窪小原	沼田裏山	久所北畑ノ原	塚原玉峰	狩野馬場	狩野久保	関本	怒田上原	雨坪	福泉	弘西寺	猿山	坂下	一本松	千代南原	千代仲の町	永塚	曽我病院	高田宮町	中里	国府津小前	国府津町畑	国府津山	田島弁天山	城前寺裏	上曽我	上田	下山田	金子台	天神山	八幡山	水之尾	明神山	芦の湯	仙石原	二の平	
旧石器時代	前期																																													
	中期																																													
	後期																																									○				BC13000
縄文時代	草創期																	○																												
	早期																			○																		○	○						
	前期																			○																○										
	中期				○				○	○	○		○						○			○								○	○		○			○	○	○			○			○	
	後期								○	○		○				○						○														○	○	○							
	晩期							○																													○									BC700
弥生時代	前期																																													
	中期	○				○		○								○					○													○											
	後期		○					○	○	○														○	○	○	○		○										○				○		AD300
古墳時代	高塚式古墳						○								○																															
	横穴式古墳																														○	○		○											
	古墳時代の土師器			○				○		○													○	○	○	○	○		○																	AD700
古代																							○	○	○	○	○																			
																							○	○	○	○	○																			AD800

小田原市とその周辺における主要遺跡編年表

・石鏃（せきぞく）―小型で矢の先や銛（もり）の先につけたもの
・石槍（せきそう）―槍（やり）の先につけたもの
・石斧（せきふ）―打製・磨製の２種類があり、斧（おの）・のみ・
　　土掘り具などとして使われたもの
・石匙（いしさじ）―石のナイフ
・石錘（せきすい）―石の錘（おもり）で漁労に用いたもの
　他に石皿・石棒・凹石などもある。

また、骨角器には、骨鏃（こつぞく）・骨針（こつばり）・骨篦（ほねべら）・銛（もり）・鉤針（かぎばり）などがあり、漁労と関係の深い道具が多くみられる。

竪穴住居　縄文時代の人々の住居は、どのようなものであっただろうか。初めの頃は、自然の洞窟（どうくつ）や岩陰に住んでいた。

その後、ムラがつくられ、人々は竪穴（たてあな）住居に住むようになる。こ

の住居は、地表を深さ数１０cm掘りさげたものが一般的で、柱を何本か立て屋根は草や土などでふいたものが普通である。発掘調査でみつかるこの住居の平面の形には２つの種類があり、１つは隅のまるい長方形のもので、他は円形に近いものである。家の平面の直径はおよそ５ｍくらいのものが多く、いずれの形のものでも床の中央部に炉が存在するものが多い。

当時の人々にとって炉は生活上重要な役目をもっていた。夜間の照明になったことはもちろん、保温や、湿気をとり除くこと、食生活での煮炊きをする場所でもあった。

南関東地方を中心に、山梨県・長野県などにかけて、床に河原石や平石を敷きならべた住居の跡がよく発見される。これを敷石住居と呼んでいる。これは縄文時代中期から後期の頃にさかんに造られた。

小田原地方でも敷石住居の跡がみつかっている。久野北側下遺跡をはじめ、１６例の出土事例があり、様々な形のものがある。立石のあるものや敷石の上で火を使用した例があり、屋内祭祀や住居廃絶時の儀礼が存在した可能性が考えられている。

羽根尾貝塚　縄文時代の人々は、狩猟・漁労・植物採取で食べ物を得ていて、これは、旧石器時代の生活とほとんど変わっていない。人々の毎日の食事の食べ残りは、住居の近くにまとめて捨てられた。貝がらや、魚や獣の骨などはもちろんのこと、人々の使用していた土器の破片や石器なども同じ場所に捨てられた。これらは、長い年月の間に地中に埋もれてしまった。

羽根尾貝塚出土品

１８７７年（明治１０）アメリカの動物学者モースが、東京の大森貝塚を初めて発掘してから、各地でたくさんの貝塚が発見されて

いる。貝塚は、当時の人々の食生活や活動の様子を知るうえで重要な遺跡である。羽根尾貝塚は小田原市内で発見された唯一の貝塚であるとともに、縄文時代の泥炭遺跡として、これまでのところ神奈川県では類例のない希少な遺跡として知られている。貝塚は大磯丘陵から派生する標高が２４ｍほどの丘陵先端にある。狭い尾根の斜面に立地し、現在の海岸線から１㎞ほどのところにあるが、７，０００～５，０００年ほど前は、「縄文海進」とよばれる海水面が現在より数ｍ高い時代であり、羽根尾貝塚の近くまで海水のまじった水域が広がっていた。

２　水田耕作と金属文化の伝来

新しい文化のおこり　１万年以上もの長い期間続いた縄文時代も、紀元前８世紀頃より新しい弥生時代へと移行し、コメ作りを中心とした農耕社会が始まる。弥生時代は、遅くとも紀元前３世紀頃から紀元３世紀頃まで続いた。

小田原地方が、弥生文化の伝わった西日本の地とは地理的に離れていることや、縄文文化の伝統の強い南関東にあったことなどから、弥生文化が縄文文化ととけ合って当地方に入ってくるのには、かなりの年月がかかったと考えられており、小田原地方の弥生時代の遺跡も、弥生文化の伝わり方と関連して、ほとんど中期・後期のものに限られている。（前期もわずかにある）

弥生土器　弥生時代は縄文時代よりはるかに短いが、この時代に使われていた土器も大変変化に富んでいる。弥生土器には、大きく分けて３種類のものがあり、その第１は甕（かめ）の形のもので、主に煮炊き用として使われた。次が壺（つぼ）といわれる形のもので、貯蔵用として使われた。もう１つは高杯（たかつき）という高い脚が付く椀形のもので、主に食事の際に

弥生土器
（羽根尾堰ノ上遺跡より出土）

食べ物等を盛る供膳用として使われた。元来は木製であったものが土器として作られるようになったものである。

弥生時代中期の遺跡としては、紀元前２世紀後半ごろに出現した中里遺跡がある。中里遺跡の土器で注目されるのは、縄文文化の伝統を引き継いでいるかのような地元の土器に混じって、瀬戸内海東部の弥生土器が出土していることである。壺、甕ともに形や文様が地元の土器と大きくことなっていることがわかる。１００軒近い竪穴住居のほか、集落の中心には神殿らしき大型掘立柱建物も見つかっている。集落の作り方なども、農耕（稲作）を取り入れ、そこから生まれた祭祀のスタイルも瀬戸内海東部などの西方からやってきた弥生人たちの影響がうかがえる。

中里遺跡出土品

橘中学校の校地内で見つかった羽根尾堰ノ上遺跡の弥生土器は中期の最後の頃のものだが、壺や高杯の文様は、縄文だけの簡素なものとなっている。この弥生土器が出土した同じ住居跡から、大変珍しい鳥形土器も見つかっている。弥生時代には信仰の対象として鳥を銅鐸に描いたり木で形作ったりしていたが、土器の例は大変珍しい。

金属器の登場　新しい弥生文化の特色の一つは、青銅器や鉄器などの金属器が使われるようになったということである。それ以前の縄文時代では、石器がもっとも鋭い道具であった。

世界の歴史をみると、一般に石器時代から青銅器の時代へ、さらに鉄器の時代へと移るのであるが、日本の場合は少し異なっている。大陸から金属器の文化が入ってきたときは、すでに青銅器の文化と鉄器の文化が交じり合っていた。

青銅器には、銅剣・銅鉾・銅鐸などがあり、銅剣・銅鉾は北九州を中心に、銅鐸は近畿地方を中心に多く発見されている。銅は鉄とくらべて細工がしやすく、祭などの飾り用具に多く使われたほか、多量に必要となる狩猟用の矢尻に使われた。鉄はその固さを活かし

て工具とか武器として使われた。銅は鋳造、鉄は鍛造で製品が作られることが多かった。

鉄の刃物の発達は、木器の製作を容易にした。この頃の木器としては、鍬（くわ）・鋤（すき）・田舟（たげた）・田下駄（たげた）・杵（きね）・臼（うす）などの農具が多く作られたが、鉢（はち）・椀（わん）・高杯（しゃくし）・杓子（さじ）・匙（さじ）などのほか、機織具（はたおりぐ）などの大きなものも作られている。

小田原地方でも、府川の諏訪の前遺跡から、銅鏃（どうぞく）５点と鉄鏃１点が発見されたという報告がある。それによると、銅鏃は全長３．６㎝、茎の長さが１．３㎝のものである。鉄鏃はかなりさびついていたが、大きさは全長４．８㎝、幅２．３㎝の大きさのものであり、ともに弥生時代末期のものである。

木器としては、弥生中期の遺跡である中里遺跡から木槌（きづち）と鋤の半分が出土している。木器の頭部は椎（しい）で作られ、長さ１３．２㎝あり、柄の部分は檜（ひのき）で、３つに折れている部分をつなぐと１９．７㎝もある。また、鋤の頭部も椎あるいは樫（かし）のような固い木で作られていて、長さ１０．２㎝、厚さは刃の部分で８㎜ある。

稲作　稲作技術の伝来は、人々の生活に大きな変化をもたらした。米作りの始まりによって、人々は食料を安定して得られるようになり定住化を一層進めることになる。同時にそれは土地や富をめぐる争いも生んだ。

小田原地方に住んでいた人々も、米作りに適した湿地帯のまわりに生活の場を移していった。それを裏づけるように、弥生時代の遺跡や遺物が、酒匂・小八幡・中里・高田・千代・永塚などの足柄平野東部の平地に多くみられる。

北ノ窪の小原遺跡からは、１９６２年（昭和３７）の発掘調査の際、多量の炭化米が発見されたと報告されている。

米作りには、いろいろな農具が使われた。その大部分は木製農具であり、小田原においても前述の中里遺跡からの木槌や鋤、さらに、曽我病院内の遺跡からは、水路施設の一部と考えられるものまでみつかっている。千代台地周辺の土地から、米の収穫のときに使われた田舟や田下駄などの用具が発見されている。

さらに、住居は竪穴式のほかに、平地に家を建てる平地式のものが現れるようになり、収穫した米を貯蔵する高床式の倉庫なども造

られたようである。
　縄文人と後に移動してきた弥生人は、米作りを通して、いくつかの家族が集まり、小さな集団をつくってとけ合っていき、新たな日本列島人を生みながら生活をはじめた。これが「ムラ」のおこりであり、やがて、ムラは、力の強いものに統合されて「クニ」へと移り変わっていった。この統合は西日本から進み、やがて関東をはじめとする東国の地に及んでいくのである。

２　古代の文化　―大和・奈良・平安―

　水田耕作を主体とする新しい文化は、日本列島の人々の生活を変えただけでなく、社会の仕組にも大きな影響を及した。
　日本の各地方には小さなクニができ、それらが大和に発生した強い勢力である大和政権によって、３世紀後半から４世紀にかけて、次第に統一されていったのである。それは、小国を支配していた豪族たちを、新たに氏姓制度という仕組の中に組み入れた国家であった。
　国内の統一を成しとげた大和政権は、たえず、大陸の文物を取り入れていった。７世紀に入ると、豪族の争いが起こったので、大和政権は、新たに天皇を中心とする強力な統一国家を造ろうとして６４５年（大化１）大化の改新を断行した。それは、唐の政治の仕組にならった律令制度の国家を築く大改革であり、その結果として７１０年（和銅３）奈良に壮大な平城京が造られる頃にその成果が表れた。その後７０余年間を奈良時代という。貴族によって生まれた華やかな天平文化は、「咲く花の匂うが如く」といわれ、奈良の都を中心として栄えたが、それとは裏腹に東国に対する支配が強まり、東国農民の負担は重いものであった。
　８世紀の中頃になると、早くも律令政治にいくつかの矛盾が生まれ、もはや平城京は、貴族や僧侶の政権をめぐる争いの場となったので、７９４年（延暦１３）、都は京都に移され、政治の立て直しが図られたのである。この都を平安京といい、これから約４００年間、鎌倉幕府が始まるまで、貴族を中心とする政治が繰り広げられた。
　このような古代日本の歴史の流れの中で、大和を遠く離れた東国

の地、わが郷土にはどのような生活が展開されていたのであろうか。

1　久野の円墳と田島の横穴基

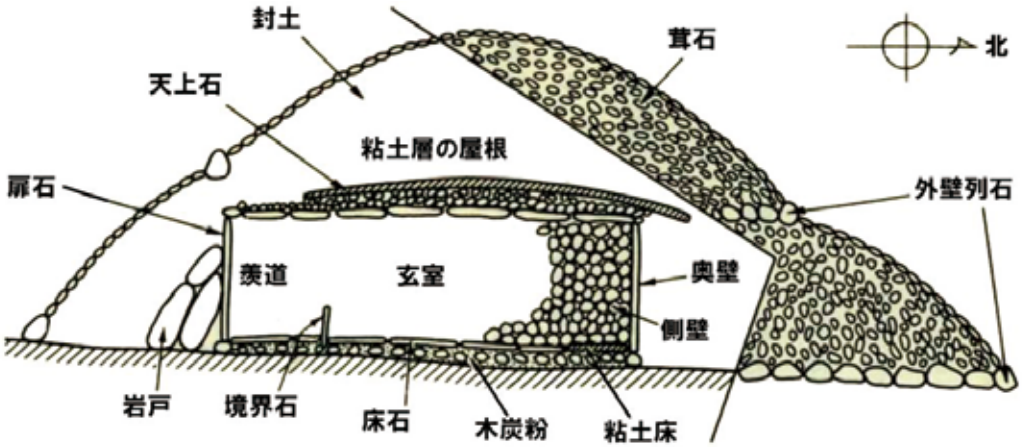
水田耕作の技術が箱根・足柄の山を越え、小田原周辺の人々に定着したのが紀元前後の頃とすれば、大和政権の全国統一の事業が始まる３～４世紀頃まで、遠く離れた東国の地では、まず、中央の政治勢力とは無関係に村づくりが始まり、国づくりが進められ、やがて、それらは有力な豪族によって一地方全体を支配する勢力へと成長していった。しかし、そういう地方勢力の様子をはっきりと示す史料はない。そこで、私たちは考古学の成果を合わせて考えていかなければならない。

大和政権では、その権威を誇るため、盛んに雄大な墓を造った。服属した地方の豪族たちもこれにならって、塚に支配者を葬った。これを古墳といい、その形や分布の状況・副葬品によって支配勢力の移り変りや当時の文化を想像することができる。

古墳には、円墳・前方後円墳・方墳・前方後方墳・上円下方墳などの種類があり、また、造られた時期によって、前期（３～４世紀）・中期（４～５世紀）・後期（６～７世紀）の３つに区分されている。

神奈川県下には、相模川や多摩川の流域に、古墳時代前期から中期のものと思われる前方後円墳や前方後方墳が各所に見られる。

第４号古墳の断面見取り図



（「わが町の歴史『小田原』より）

いずれも近畿地方のものに比べると規模は小さいが、平塚市真土の大塚山古墳・川崎市加瀬の白山古墳・横浜市の観音山古墳・海老名市の秋葉山古墳などは壮大で、その地域の王者の墓を思わせる威容を備えている。私たちの郷土小田原には、このような大きな古墳はないが、箱根山の東麓にそって、いくつかの円墳群が見られる。また大磯丘陵内や西側の断層崖に沿って古墳の仲間である横穴墓が発見されている。

久野川のほとりに立って北の方を眺めると、箱根の山裾から東へなだらかに横たわる諏訪の原という高原状の丘陵がある。その稜線上に、こんもりと雑木におおわれた小円墳がいくつか眺められる。昔から「久野百塚」や、「九十九塚」などといわれて、人々の注目を集めている久野古墳群である。中でも丘陵の東端にある円墳の１号古墳は、他の円墳群を離れてひときわ大きく眺められる。この円墳は、標高約７０ｍのところにあって、その大きさは、直径４０ｍ、高さ８ｍで、ほぼ完全に保存されている。久野坂下の集落の上にあるので、昔から坂下の大塚とか、百塚の王塚などと呼ばれている。小田原地方では最大のもので、その上に立つと、足柄平野を一望にながめることができる。その円墳から西方には、たくさんの小円墳が連なっている。これらの円墳は、いずれも古墳時代後期に造られたものと推定されている。１９５１年（昭和２６）秋に学術的な発掘調査が行われた４号古墳は、それらの群集墳の一つである。

この円墳の大きさは、直径２０ｍ、高さ３．５ｍで、もとの形は、お供え餅を２つ重ねたような二段式の円墳であったようである。その内部は、幅１．５ｍ、長さ約８ｍの横穴式石室が南に向って開口し、玄室には２体以上の人骨が認められた。ほかに、玉類や鉄の鏃・鉄の直刀・土師器などが副葬されていた。石室に使われていた石材のうち、安山岩は、この古墳から山裾へ８００ｍほどはなれた欠上付近に露出している根府川石が使われたものと推定されている。多くの労力と長い年月をかけて造られたもので、おそらく、久野川流域に栄えた有力者の墓であろうと考えられている。

小田原市の東部、大磯丘陵の断層崖に沿って発見される横穴墓は、久野古墳群と同様に群集墳の性格を示している。上曽我・下曽我・田島などの集落の背後に、斜面の凝灰岩層をくりぬいて数個ずつ群れをなして造られている。

１９３３年（昭和８）に、田島の丹沢川のほとりで４基の横穴墓が発見された。その中からは人骨のほか、玉類・鉄の直刀・須恵器・土師器・金環など、後期小円墳に見られる副葬品と同様のものが発見されているが、その規模においては、久野の円墳よりやや庶民的な姿をもっている。

このように、小田原周辺の古墳が、相模川や多摩川の流域の古墳に比べて規模が小さく小円墳や横穴の群集墳に限られるのは、酒匂川流域の生産力が低く、支配者の経済的、文化的地位において、前者より劣っていたことが想像されるのである。

平安初期につくられた「先代旧事本記」には、成務朝（２世紀頃）に、相武・師長・武蔵・秩父の国造がおかれたことを初めて伝えている。その相武・師長は現在の神奈川県にあった国であるが、それぞれ、どこに位置したかは明らかでない。しかし、久野古墳などの存在によって、足柄平野とその西麓一帯には、師長といわれる一つの国家が成立していたと考えても差支えないと思われる。また、東国の風土記として現存する唯一の常陸風土記（８世紀）には、「足柄坂より東の諸県を我姫国といい、孝徳天皇（７世紀）の時に、足柄坂より東の地、我姫之道を八ヶ国に分けた。」と記されている。このことは、この頃大和政権が東国を征服し、日本を統一していく事業が次第に進んでいることを示している。

２　相模国と国府・官道

８世紀に入り律令政治が整えられると、相武・師長の二国と鎌倉別の三区域の旧勢力も皇室に服属したため、このころ一つにまとめられて相模国となった。中央には二官八省がおかれ、地方は国・郡・里に分けられ、国司・郡司・里長という役人が治めるたてまえとなった。相模国は、足上郡・足下郡・余綾郡などに分けられていた。相模国は東海道に属し、国府は現在の平塚市に置かれたが、後に大住国府の時代を経て、平安時代後期には余綾郡国府本郷（中郡大磯町）に移された。大住国府の位置は、今日では現在の平塚市四之宮付近と考えられるようになってきているが、国府移転にともなって国府間をつなぐ官道も移り変った。

朝廷の東国支配が強まるにつれて、７７１年（宝亀２）には、今まで東山道（中山道）に属していた武蔵国が東海道に改められ、相

模・武蔵の調・庸を都へ運ぶ人々や官人の往来が盛んになると、東海道を南北にさえぎる険しい箱根の山々は大変な難所となった。もちろん、官道が整備される以前から、人々が物資の交換に利用した道が発達していたに違いない。奈良時代以前の箱根山の東側と西側の集落を結ぶ交通路については明らかではないが、地形や古代の遺跡・遺物から次の２道が推定されている。

●碓氷道（奈良時代以前）
横走（御殿場）― 乙女峠（１，０００ｍ）― 仙石原
― 宮城野 ― 碓氷峠(明神峠、1，１６５ｍ)― 坂本(関本)

●足柄道（奈良・平安時代）横走（御殿場）― 竹の下
― 足柄峠（８４９ｍ）― 坂本（関本）

碓氷道は、駿河国横走（御殿場）から乙女峠を越えて一度火口原に下り、仙石原・宮城野の集落を経て明神岳の頂上に上り、そこから大雄山最乗寺あたりへ下がって坂本（関本）に達する文化交流の路である。足柄道は横走から足柄峠を越えて直接駿河国と相模国を結んでいる。

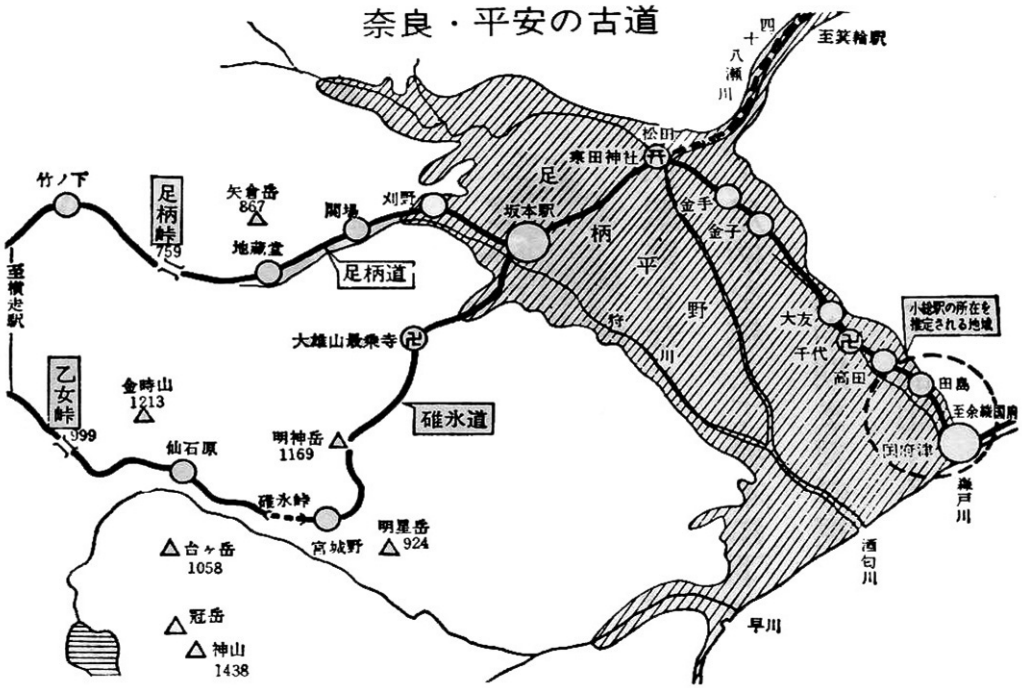
奈良時代になって、これらの山道が東海道の箱根越えの横断路となると、乙女・明神の二峠を上り下りする碓氷道よりは、横走と坂本を東西に結ぶ最短最低の足柄道が主道となった。

８０２年（延暦２１）富士火山の噴火により足柄道がふさがれて、一時箱根道が開かれたが、翌年には復旧されているので、平安時代を通じてほとんど足柄道が主道となった。

当時の足柄道は旅人にとっては大変難儀な道であったようである。万葉集の中には、旅の安全を願う気持ちからこの坂路をよんだ歌がかなり見うけられる。また、東国に赴任した国司、常陸介菅原孝標の娘は旅の思い出を記した更科日記に、「足柄山といふは、四、五日かねておそろしげにくらがりわたり、やうやう入り立つ麓のほど

足柄峠　“おそろしげに、くらがりわたった”
足柄峠も今は楽しいハイキングコース

だに、そのけしき、はかばかしく見えず、えもいわず茂りわたりて、いともおそろしげなり。」と書いている。足柄山が、うっそうたる原始林におおわれた恐ろしい山道であったことがよくわかる。



古代の交通の要所国府津　相模国の古い駅路は、箱根山を越え足柄平野の北の山際（ざわ）を通って中郡北部（旧大住郡（おおすみぐん））に達し、今の海老名市を経て武蔵国に入ったのであるが、平安時代中期になると足柄平野の東辺を大磯丘陵に沿って南下し、国府津付近に達する海岸に近い道が駅路となったのである。

箱根・足柄を越えて坂本に下った古代の人々は、足柄平野をどういう経路で通過したのだろうか。奈良から平安時代中期までの東海道は、坂本駅から松田に出て、ここから四十八瀬の渓谷に沿って秦野に達し、箕輪（みのわ）駅（伊勢原市比々多）を経て海老名に達する山際の駅路であったが、平安時代の中期以後は、松田から南に下り、金子・金手・大友・千代の集落を通り国府津付近で一度海岸に出て大磯丘陵を迂回し箕輪で山際の道と合流する南方道路が駅路となったと推定されている。

駅路には、*約３０里（約１７ｋｍ）ごとに駅が設けられ、官人の宿泊する駅家と人や荷物を乗り継ぎする駅馬や伝馬が用意されていた。平安時代中期に作られた「延喜式」には、相模国の駅路について、「相模国の駅馬は、坂本に二十二頭、小総・箕輪・浜田の各駅には、それぞれ十二頭を置き、伝馬は、足柄上郡・中郡・高座郡に、それぞれ五頭ずつ配置する」と記され、また「倭名類集抄」には、「相模国の駅家は、足柄上郡・下郡・中郡・高座郡にそれぞれ駅家を設ける」と記されているので、小田原地方には、上郡に坂本駅、下郡に小総駅を置き、坂本駅は駅・伝馬あわせて２７頭も置かれた大駅であったことが知られる。＊古代の一里は約５６７ｍ

小総駅については、「大和物語」に、「小総駅といふところは海辺になむありける」とあり、「枕草子」には「をふさの市」の名が見える。時代はずっと下るが江戸時代後期に作られた「新編相模国風土記稿」には、「小字市場は、東海道の西、親木橋詰を云ふ、駅家たりし遺名なるべし、今は市あるにあらず」と記されている。海辺に面し、都人にも知られる市が立つほどにぎわった宿駅であったことがうかがわれるが、その位置は今の国府津付近であろうと推定されている。また、この駅路には、坂本・小総の２駅のほかに、数個の要地があった。足柄上郡松田付近は、南方道路への分岐点であり、急流酒匂川の渡河点でもあった。松田には、相模国の延喜式内社十三座の一つ寒田神社があるから、相模川の渡河点にある寒川神社とともに旅の安全を祈願するところとして古くから開けていたのであろう。

「新編相模国風土記稿」には、国府津の地名について、「隣郡余綾の属に国府本郷あり、古へ府庁の所在地なり、爰より相距ること三里許なれど、彼地の海辺は荒磯にて艤舟の便あしければ、若くは当処を以て彼の国府の津港とせし事ありて此地名起りしにや」と記している。国府津には船舶の出入りに大変便利な入江があり、古墳時代後期から水上交通の要所として、在地首長の支配拠点であったと考えられる。国府津三ツ保遺跡では石組井戸での祭祀の痕跡や多数の住居跡が確認できており、円墳も多い。また、畿内や東海地方で作られた土器や須恵器が出土している。遺跡から考えられるように、古くより港として機能していたため、地名と国府を結びつける説を考えたと思われるが、「国府津」は南北朝時代になってから現れる

表記であり、当て字である。鎌倉時代には、「古宇津」「粉水」「郡水」と表記されていた。

3　民衆の生活と信仰

奈良時代の民衆生活の実情を示してくれる史料はまことに乏しい。令の規定で彼らは口分田を与えられ、租・庸・調などの負担を担っていたほか、軍役その他が厳しく課せられた。たまたま残る７３５年（天平７）の「相模国封戸租交易帳」や、法隆寺・四天王寺の資財帳などによれば、足柄上郡の岡本郷、下郡の倭戸郷・垂水郷・高田郷などは、光明皇后や舎人親王、あるいは法隆寺・四天王寺などの封戸となっており、これらの貴族・寺院の経済を担っていた。すなわち、ここに住む農民の生産によって生まれた稲は、これら貴族・寺院の収入となった。

奈良時代に編纂された「万葉集」には、相模国をはじめ東国の各地から遠く九州の防衛に徴発された防人の歌が載せられているが、その中に下郡の出身であることがわかる人の歌も載っている。それらの中には「大君の詔かしこみ磯に触り海原わたる父母おきて」という歌や「足柄のみ坂たまわりかえりみず吾はこえゆく……」と故郷の父母、妻子のことを不安に思いながら、遠くに行かなければならない農民の心を切実に表しているものが少なくない。

古代瓦（千代台出土）

市内上府中の千代台地は、大磯丘陵の西側にある東西約５００ｍ、南北約４００ｍの平たい独立台地である。この台地からは、縄文・弥生・古墳・奈良・平安の各時代の土器が多数発見されているので、古くから集落が発達していたことを示している。先にも述べた大化の改新以前のその土地の長が住んでいた場所であったと考えることもできるが、この台地には、観音屋敷・弥勒畑・堂の脇・堂の後・塔の腰などの地名が広い範囲に残っている。また、

奈良・平安時代に寺院の建設に使われた、すぐれた古代瓦が多量に発掘採集され、礎石も発見されている。奈良時代の仏教は、国家との結びつきが強く、天皇や貴族は仏教を盛んにし、その力によって国を栄えさせようと考えたのである。特に、聖武天皇は７４１年（天平１３）全国の国府の所在地に国分寺と国分尼寺とを置き、国家を守る役目をもたせた。相模国には、相模国府の所在地である海老名市に置かれたらしく、今もその寺跡をとどめているが、この千代台地の寺院跡を一度は国分寺として造営したものの名残りではないかと考える人もいた。しかし、国分寺は、国家のためのものであり、民衆にとってみれば労役の奉仕などに徴発されるだけで、決して信仰と結びつくものではなかった。だから次第に荒廃してしまった。一方で、千代台地の寺院に関連して次のような縁起が伝わっている。

千代台地の西方、酒匂川左岸の飯泉に、坂東三十三観音の一つで、第５番の札所とされている相模の名刹、飯泉山勝福寺がある。飯泉観音の名で人々に親しまれているが、その縁起によると、７５３年（天平勝宝５）に唐の大明寺の僧鑑真が来朝した際にもたらした秘仏十一面観音像を、孝謙天皇に献上したが、天皇がこれを道鏡に賜わったので、道鏡は安置の地を相模国の弓削氏の食封（朝廷から賜わった封戸）の地千葉に定め、建立したのがこの寺であり、千葉山弓削寺、俗に千代観音といった。

後に８３０年（天長７）春、飯泉に移されたと伝えている。坂東に観音信仰が盛んとなって、札所ができあがっていったのは鎌倉時代の中期であるから、こういう縁起つまりお寺の成立を伝説などによって作り上げていったのは、もちろんそれ以後である。他にも全くこれらを裏付ける史料がないので、これらのことは事実ではない。今日伝わっている十一面観音菩薩像も平安中期以降のものである。しかし、平安時代の中・末期から鎌倉時代にかけてのころ、民衆の支持と信仰を集めた観音霊場がここにできあ

飯泉観音

がっていることは、仏教が国家・貴族のものから民衆のものへと変っていったことを物語っている。

仏教を国家のものから民衆のものへとし、仏の功徳を説く布教の働きをしたのは、天台・真言二宗などの聖といわれる僧侶であったと思われる。そして、この付近で東国観音信仰の布教の中心となったのは、箱根山の僧たちであった。箱根権現の縁起には次のようにある。

箱根権現は、奈良出身の高僧万巻上人が東国に教えを広めた折り、７５７年（天平宝字１）箱根山に留まって修業を重ね、古くからある箱根産土の神々を芦の湖畔にまとめて祀った。これが箱根三社権現であり、当時は神仏は同じものであると信じられていたため、仏が神の姿になって現われたものという意味で権現という。上人は同時に権現の世話をする別当院として、箱根山東福寺（金剛院）という真言宗の寺院を開設した。箱根権現の建立は、後に相模・駿河・伊豆地方まで、仏が神の姿で現れるという信仰を広め、多くの権現社が建立され、箱根はその中心として発展したのである。おそらく、飯泉の寺院と同じころ成立したのではあるまいか。

平安時代になると、小田原地方にも天台・真言二宗による寺院の建立が見られ、国府津の勧山真楽寺（天台宗・現在は浄土真宗）や国府津山宝金剛寺（真言宗）は現在に引き継がれている。また、箱根・丹沢の山々も一大霊場となり、人々の信仰を集めていた。

丹沢の一角にそびえる大山の東面にある日向山の宝城坊は、日向薬師の名で親しまれているが、もとは、霊山寺という真言宗の寺院の一坊であった。相模国早川荘に関係の深い貴族に、相模国司として下向した大江公資という人がいるが、その妻の相模という女性は夫とともに下向し、箱根にも日向薬師にも参詣し、たくさんの和歌を奉納している。その中に、「さして来し日向の山を頼む身は目も明らかに見えざらめやは」とお堂の柱に書きつけたという。これは、「相模集」という彼女の歌集にのっているが、この時代のさかんな霊場信仰を物語っているといえよう。

４　荘園の発達

大江公資が国司として下って来たのは１１世紀、そのころ都では藤原氏の摂関政治が華やかに繰り広げられていた。しかし、地方

をみると、私有地である荘園はますます増え、律令政治は崩れていった。中央の貴族にとって、地方は自分の収入を得る所であり、国司になるのも、地方を治めるというより収入をあげる最良の方法としか考えなかった。だから、朝廷は律令制の再建をめざし、９世紀末から１０世紀前半にかけて、国司の交代制度を整備し、国司の最上席者に大きな権限と責任を負わせるようになった。この地位は、一国の財産を前任者から引き継ぐことからやがて受領と呼ばれるようになった。

荘園の分布
（「目で見る小田原の歩み」より）

１１世紀後半になると、受領も交代の時以外は任国に赴かなくなり、かわりに目代を留守所に派遣し、その国の有力者が世襲的に任じられる在庁官人たちを指揮して政治を行わせるようになった。

一方、１０世紀後半になると、国司の子孫や地方豪族の中に、国衙から臨時雑役などを免除されて一定の領域を開発する者が現れ、１１世紀に彼らは開発領主と呼ばれるようになった。地方の実力のある豪族は、地位を利用して自分の支配地を広げようとした。同時にかれらは荘園の境界や用水の争いに備えたり、盗賊を防いだりする必要から、自ら武力を貯えて自分の土地を守った。

小田原地方では、平安時代末期までの間に、今の早川から山王川にいたる平坦地が、次第に開発された。また酒匂川左岸の沖積平野の成田あたりも、その北の大井近辺も、曽我山の麓も開発されていった。それらの土地は開発した者の私領となり、国家に対して租を収めようとはしなかった。こういう私領が荘園と呼ばれた。これらの荘園は、地形的に水害から守られている段丘や、自然堤防などから少しずつ開かれていったのであろう。そして、その開発の中心

となった領主たちは、その土地の名をとって姓とした。大友郷の大友氏などは、その例である。また、国家や他の豪族の侵入から自分の支配地を守るために、貴族や寺院、神社などに荘園を寄進をすることが多くなった。

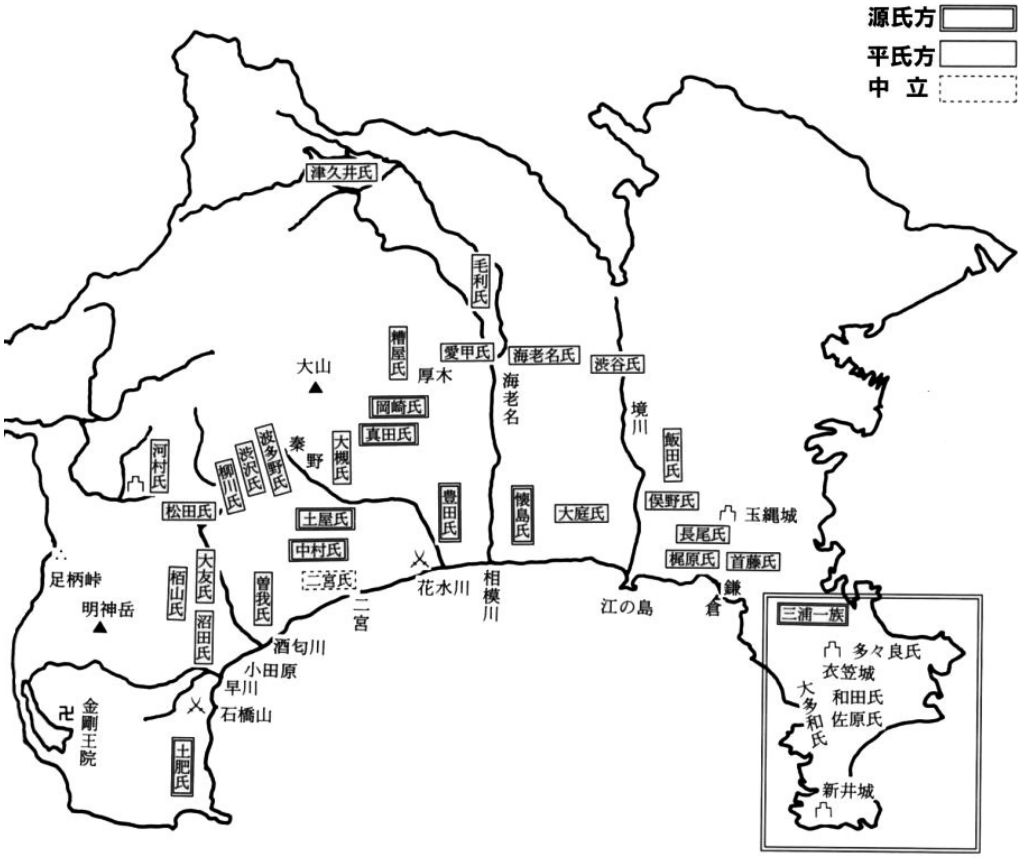
小田原地方の荘園で、僅かながら史料があるのは早川の荘である。しかし、その広さや構造は正確にはわからない。その成立についてみると、中流貴族で、相模国に国司として下向した大江公資の子の大江広経は、天下に最大の権勢を誇った藤原道長の子の民部卿長家に、この荘園の名義だけを寄付した。長家はやがて女婿の前九条太政大臣藤原信長に、この早川の荘の名義をゆずり、以後その子孫が受け継いだ。したがって早川の荘は、実際の所有者（領家）大江氏と、さらに上級の所有者（本所）九条家流藤原氏の二重の領主がいたことになるが、九条家の荘園ということになる。京都にいる大江氏からみれば、遠くにある早川の荘が、役人や近くの豪族たちに侵されることを防ぐため、権力の強い貴族の権威を借りて荘園を守ろうと、名義だけを寄付したのである。これが寄進といわれるもので、この風潮は全国的に広がり、当時最も権力の強かった藤原氏一族のもとには、多くの荘園が集まってきた。

この早川の荘に関する１０９５年（嘉保２）の史料に、「早川御牧、在相模国」と記されている。「御牧」とは、傾斜地や牧野を意味するので、この頃（平安末期）では、まだ一面が山野で、水田が少ない土地であったことがわかる。それから３５年を経た１１３０年（大治５）の史料では、「早川の荘」となっており、開墾が進んだことが推察できる。しかし、大江氏またはその子孫が、実際にこの地域を開発したものではない。おそらく、公資が国司の時に開発者から寄進されたのであろう。その開発者とは、鎌倉時代の史料に登場する早川氏、あるいは小早川氏と称する土肥氏の一族であったと思われる。

こういう地方の荘園を開発した領主すなわち土着の武士たちは、東国の武蔵、相模にはたくさんいた。相模国では、三浦半島に三浦氏一族、湘南地方に鎌倉平氏の一族、西湘地方に相模平氏の一族、秦野地方に波多野氏一族、海老名方面に海老名氏などの集団が、平安末期までの間に荘園を舞台にして成長していった。

小田原の近くでは、湯河原付近の土肥氏、早川の荘の小早川氏ら

が、中央貴族、特に清和源氏の源頼義やその子義家が、前九年の役、後三年の役などで陸奥国（青森県）に出征した際、その従者として従軍し、その家臣となっていった。特に頼義が鎌倉に八幡宮を建立してからは、相模国の武士で源氏に臣従してくるものが多かった。



相模の国の主な武士（鎌倉時代初期）

（「図説　小田原･足柄の歴史」より）